炭鑛業の對農影響

福岡縣の調査

筑豐を中心として福岡縣の炭鑛業の隆盛が大小都會の發展發達となり爲めに農業に及ぼせる影響に關して福岡縣農會では農商務省補助の下に大正九年度より調査に着手し此程大體を終えたが大正九年度に於ける縣下八郡の出炭狀況左の如し（單位萬噸）

	坑數	出炭量 萬噸	人員 人	平均賃銀 錢
嘉穂	四三	五一三	五三、〇〇三	二、四四
田川	三八	三四七	四六、四六四	一、六七
鞍手	三三	二七九	二九、五四九	二、二五
遠賀	二〇	一五〇	一六、一四五	二、〇〇
粕屋	一九	七〇	一四、六七八	一、九五
早良	四	四一	三、七八〇	二、二八
三池	三	三三	一、九九九	一、七一
企救	一〇	二	一、七三四	二、三五
計	一六八	一、四三五	一六七、三五二	二、〇〇

此等の炭坑以外各種工場數は八郡合計三百二十九に達し是れによる人口の增加は明治四十年八郡總戸數十一萬七千三百八十一戸大正九年に至り十九萬千二百五十戸となり十四年間に八萬三千八百六十九戸の激增を示してゐる而して縣全體の十四年間に於ける增加數は十一萬八千六十四戸であるから八郡のみでも縣全數に比し七割以上の增加となつてゐる一方農業戸數は明治四十年にて五萬二千五百四十六戸而るに大正九年度には四萬五千八百四十戸となり六千七百二戸の減少を來し縣全體の農業戸數は一萬二千七百四十九戸の減少であるから八郡のみで五割以上の減少となつてゐる此等は延いて農業狀態の不振となり農產物に影響を來した次第であるが經濟上から見ればその影響は別種の問題とならう只炭坑の殷盛に伴ふ農耕地の被害は大正八年度に於て六千七百八十町步內陷落傾斜地面積四千三百十町步及び耕作不毛に歸してゐるのが三百二十三町步に達してゐる一面勞力不足による裏作に手を染ぬのが二千四百九十二町步で全然放棄してゐるのが百五十四町步である栽培管理不充分になつてゐるのが四百十四萬千餘圓になつてゐる此等は郡當局に於て如何に處置監督するか一旦炭坑不況後の歸農問題等を十分に考究する必要がある

福岡職業紹介所

數字から見た求職者

福岡職業紹介所に於て本年一月より三月迄に取扱つた求職者の本籍調査表に依ると三ケ月間に五百七十四人の求職者を受附けて居るが內男五百十五人、女五十九人でこれを府縣別に示すと福岡縣の男二百六十四人、女三十二人、計二百九十六人が最多數で次が佐賀縣の、男四十七人、女六人計五十三人、熊本縣は、男四十一人、女三人計四十四人、長崎縣男三十一人女四人計三十五人等で北海道一人、東京三人、鹿兒島十二人、沖繩二人、朝鮮五人等其他各府縣に亘り各一二名宛の求職者が福岡職業紹介所の門を叩いた事になり一ケ月平均百九十一人強の求職者を受附けて居る

大分縣と工場

職工一萬二千人

大分縣に於ける昨年末現在工場數は總計二百七十六でそれに從事する職工は男四千百人女八千六百廿二人合計一萬二千七百廿二人で此等職工に依りて十年中に於ける生產額は二千九百十一萬八千九百六十三圓九十二錢二厘である今其種別を示せば左の如し

	圓
製糸業	一三、八三三、二四五
紡績業	九、三四七、三〇六
製材業	一、三三三、四四〇
印刷業	九九六、〇三〇
精穀製粉業	八四七、八〇〇
窯業	五六八、〇六一
化學工業雜業	三三六、〇〇一
ラムネ鑛泉業	三二〇、三七五
罐詰業	二六六、六九八
織物業	二〇四、二六四
機械器具製造業	一九三、一三四
製油製蠟業	一七七、〇二七
貝釦工業	一七〇、〇〇〇
ゴム工業	七五、〇二五
製藥業	六一、三一五
醸造業	四五、五〇〇
金屬品製造業	三七、〇三四
化粧品製造業	一三、三七二
雜業	四一、五五六